

第4回「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

寒くなったら

熊谷佳代・奈良県

寒がりの母だと思っていた。

オフホワイトの綿糸で編まれた薄い長袖のカーディガン。胸には、トリコロールカラーの刺繍糸で花の装飾が施してあった。

夏用のそのカーディガンは、小学一年生の時に母が買ってくれたものだ。手編みでもなく、決して上等な物でもなかったけれど、その色形とやわらかな感触は今でもよく覚えている。

カーディガンが小さくなると、今度はピンク色のカーディガンを買ってくれた。そして、そのピンク色のカーディガンが小さくなると、母は、また別のカーディガンを買って来た。

「寒くなったら、着いや」

友達と出かける時、家族と出かける時、母はいつもカーディガンを手渡してくれた。私は、寒がりの母が、私の身体の事も気遣ってくれているのだろうと思っていた。

しかし、である。大人になり、エアコンの効き過ぎによる手足の冷えを「辛い」と感じる年齢になった今でこそ、夏場のカーディガンの有難さが分かるようになったが、小学生の頃の私が末端冷え性を気にするわけもなく、母が手渡してくれたカーディガンは、たいていカバンの中に押し込まれ、クチャクチャになっていた。

気づいたのは、数年前の事である。当時小学生だった息子が罹患し、大きな手術を受けたのだ。幸い手術は無事に終わり、経過も良好だが、首筋には痛々しい傷跡が残った。女の子なら髪の毛で隠す事もできるが、小学生の男の子がロン毛というわけにもいかないだろう。

手術を受けたのが秋の終わりだったので、私は、息子にマフラーを買ってやる事にした。春になる頃には、傷跡も目立たなくなっているだろう。

さっそく、近所のスーパーの衣料品売り場へ行き、どんなマフラーがいいかとあれこれ選んでいる時に、ふと、あの頃の母の言葉がよみがえった。

「寒くなったら、着いや」

(寒くなったら……)

「あっ！」

思いつきに、私は思わず声を出していた。もしかしたら、母は、本当は別の言葉を掛けたかったんじゃないだろうか。

私の左腕には、赤い痣がある。単純性血管腫という名前のついた消えない痣だ。赤ちゃんなの時からあるので、私にとっては、もう自分の一部分のような痣である。

母は、痣のある私にも、皆と同じように半袖の服を買ってくれた。制服も半袖、Tシャツも半袖、夏だから当たり前。子供の頃からそんなふうだったから、私自身、痣へのコン

プレックスはほとんどない。思春期もさほど傷つかずに過ごし、恋もした。初対面の人からは驚かれるので、せいぜい説明するのが面倒だな、と思う程度だ。

けれど。母にとつては違ったのかもしれない。大事な大事な娘の腕にできた痣。人目に触れる場所にできた、赤い痣。

「痣を隠したくなったら、着いや」

母は、本当はそう言いたかったのかもしれない。痣が気にならない時は、半袖の服を着ていれればいい。けれど、もしも痣を隠したいと思う時があれば、カーデイガンを着ればいい。強がる必要はないんだよ。そう言いたかったんだ。

私はカバンから携帯電話を取り出した。離れて住む母に、想いを確かめたくなったのだ。登録してある番号を押そうとして……やめた。

（「おんなじ母」だからね。）

カバンの中でクチャクチャになったカーデイガン。やわらかくて温かいそのカーデイガンを、今、取り出してきちんと畳もう。そしてまた、そっとしまっておくのだ。寒くなったら、いつでも着られるように。

「寒くなったら、巻きや」

朝、登校する息子に、マフラーを手渡しながら声を掛けた。紺色の子供用マフラー、傷跡に当たってもクチャクチャしないようにとやわらかい素材を選んだ。息子は、「うん」と言いながらマフラーをランドセルに詰め込んでいる。

（きつと、大丈夫だ）

寒がりの母は、思う。